



Title	スタディ・クエスチョンで読む古典：「政治学は科学として成りたちうるか: 理論と実践の問題」(マンハイム)を読む(その1)
Author(s)	長島, 美織
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 70, 59-76
Issue Date	2017-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/64716
Type	bulletin (article)
File Information	MC70-3_Nagashima.pdf



[Instructions for use](#)

スタディ・クエスチョンで読む古典 ——「政治学は科学として成りたちうるか — 理論と実践の問題」 (マンハイム) を読む —— (その1)

長 島 美 織

本稿は、カール・マンハイム（1893～1947）の主著『イデオロギーとユートピア』のなかの第二論文「政治学は科学として成りたちうるか — 理論と実践の問題」を題材にして、スタディ・クエスチョン（Study Questions）を用いた「学問的読み」¹の実践講義を再現するものである。²（その1）は、「第1節 なぜこれまで政治についての科学は存在しなかったのか？」を対象として、それについてのスタディ・クエスチョンと解説からなっている。

社会学や思想における文献は、その分野に新しいものにとっては、大変とつきにくい。なかなか読めずに放りだしてしまうことが多いが、それをなんとか、スタディ・クエスチョンという形で予め提示された問いの答えを探していくことを通して、「読み」の道案内をしようというのが、この『スタディ・クエスチョンで読む古典』という試みの意図である。

スタディ・クエスチョンは、勉強、つまり、題材を深く理解するための手引きとなる質問であって、通常想定される理解を試すため、あるいは、情報を得るために相手にする質問とは、性質が異なる。それは、「学び」のための道標である。本稿は、「学びの経験」（Learning Experience）をしてもらうための筆者の拙い試みである。

以下では、節ごとにスタディ・クエスチョンがまず、まとまって示される。その後、それらを導きの糸としつつ、題材である上記論文についての学問的読みがなされる。

引用はすべて対象論文からのものであり、入手の便宜も考慮して、ページ数は、『イデオロギーとユートピア マンハイム』（高橋徹・徳永恂訳 中公クラシックス 中央公論新社 2006年）によっている。引用中の下線は筆者のものである。強調のための点（・・）は、原著による。

第1節 なぜこれまで政治についての科学は存在しなかったのか？

この節についてのスタディ・クエスチョン（SQ）は以下のとおりである。

SQ 1. 既存の「政治についての科学」はどのようなものか？

SQ 2. マンハイムはそれのどのような点に不満を感じているのか？

SQ 3. 「政治学は科学として成りたちうるか」という問いに対して、第1ステップとしてマンハ

イムはどのような定式化を試みているか？

SQ 4. 「行為」とはどのようなものと考えられているか？

SQ 5. 「行動」とはどのようなものと考えられているか？

SQ 6. 「行為」と「行動」の違いは？

SQ 7. 「政治学は科学として成りたちうるか」という問に対して、第2ステップとしてマンハイムはどのような定式化を試みているか？

SQ 8. 「科学としての政治学」における困難とはどのようなものか？

SQ 9. 第1章の表題「なぜこれまで政治についての科学は存在しなかったのか？」に対する答えはどのようなものだと考えられるか？

SQ 1に関する記述は、202ページぐらいから始まるがそれまでの部分について、まずは少しずつ内容を見ていこう。

マンハイムは、この論文を以下のように書き出している。

どんな問題がそのときどきに立ち現われては、われわれの関心の的となり、やがてまた消え去ってゆくか、その消長の過程は、さしあたりまだはっきりしていないにせよ、ある構造を示す法則によって規制されている。そればかりか、諸科学全体の成立と衰退の過程もまた、つきつめれば一度特定の諸要因に還元され、そこから説明することができるであろう。(199)

第1節の冒頭部分は、第二論文の主要なテーマである「ほかならぬ政治学がまだ科学になっていないのはなぜか」(201)を導くための前段である。この論文で、マンハイムは、科学としての政治学とはどのようなものか、理論と実践の関係はどのようなものかについて論じようとしているが、それに先だって、かなり大きい視野から、そもそも何々学といった個々の学問は、どのように誕生してどのように消滅するのだろうかという疑問を提示している。つまり、ここでは、なぜ政治学という学はまだ誕生していないのか、ということに問うにあたり、そうした問いが可能な問いであるのかどうかということ、大きな観点から検証し、それは、「ある構造を示す法則」に依っており、「特定の諸要因」に還元できると述べているのである。そして、一つの例として、自身のフィールドである社会学や知識社会学の領域においても、どのような問題が重要なものと考えられ、集中して探求的となるのかについて、やはり一定の法則のもとに理解することが肝要だということを述べている。ここで、マンハイムは、学の成立ということと、どのような問題が重要なものと考えられ、どう探求されるかということが、ある問題連関の中で探求される状態になるということ、同等のものとして捉えている。

同じ意味で、ほかならぬ知識社会学にとっても、さまざまな問題や学説の消長の構造を規制している条件を追求することがますます今後の課題となってゆくであろう。それというのも、社会学から見れば、ある問題がいつ出現しどう究明されるかは、・・・ただたんに特定の偉大な個人や天才のせいにするわけにはゆかないのであって、それは、その特殊問題が組み入れられている問題連関がどのような形をもち、どの程度成熟しているかに係っている。(200)

そして、知識社会学にとっては、そのようなこと、つまり、「さまざまな問題や学説の消長の構造を規制している条件」を追及することが、「今後の課題」となる(199)という見通しが語られる。

さらにより広い意味で、社会学においては、一見バラバラに見える個別の問題や課題を連関づけることに意義があることが述べられる。

いつも存在してはいるが、片時も同じ構造にとどまることのない、根源的な生活や経験の連関から、いっさいのこういう一見孤立した事実を理解し、その連関のうちにそれぞれの事実を位置づけるところに社会学の課題がある。(200)

この部分で注目してほしいキーワードは(問題)連関である。これは、個々の着想や対象とされる問題が個別に存在するのではなく、より大きなネットワークの中に「組みいれられている」(200)というマンハイムの認識、または、逆にいうと、そのように大きな問題連関の中で捉えられなければ「学」といえない、というマンハイムの見解を表す。問題連関とは、問題は1つだけで個別に存在するのではなく、多くの特殊問題どうしがどのように関わりあって現れてきているかという、いわば、フレームワークのようなものを意味している。たとえば一つ一つの星の集まりが、相互に関連のあるまとまりとして、より大きな星座として捉えられるためには、個々の星が、その全体の配置のなかで、意味づけられなければならない。個々の特殊問題も、そのように、ある問題連関のなかで、位置づけられて始めて、学が成立すると、そのように捉えないといけないという主張である。加えて、そのような問題連関について、マンハイムは、問題連関全体の性格をとらえつつ、かつ、それを現実の状況にも即して理解するべきだと述べている。つまり、学が学のみで、ある問題連関が問題連関のみで、その背景現実と切れてしまうと、実際の学とならないといった主張である。そして、そのような理解のためには問題の背景をなしている「社会に固有の、全体的な生の連関」(200)の理解が必要であると説く。

ここで登場する「^{せい}生の」は何を意味しているのだろうか。それはつまり、すでにあるものではなく、日々出現して変化する連関であり、マンハイムは現実や実践をそのような流動的なもの

の、固定的ではないものとして見なしている。これが、副題にもある「理論と実践の問題」の意味である。つまり、刻々と移り変わっていくものと、「学」としての知識構造は、どのような関係をもちえるかということがマンハイムの興味である。そして、マンハイムは、知識社会学という学問領域が、メタ学問として、そのような学問の成立過程や条件、ある問題がなぜある時期に重要なものとして浮かびあがってくるかというイシューの探求に適していると考えたのだった。

ヒント☛ このように、同じような表現、似たような表現のくり返しに注目すること。たとえば「全体としての性格」「全体的な生の連関」(200)など。特殊⇔全体、個人⇔全体などの対比を表わす言葉の使い方や、「背景」のように位置を示す言葉にも注意して読んでみよう。

先程のキーワードである**問題連関**に加えて、「**全体の連関**」(200)という表現にも注目してほしい。これは、後に出てくる「根源的な生活や経験の連関」(200)がより具体的に表している。「全体の連関」と違うものとして「宿命的」「ひとりよがり」「ふりかかってくる」(200)のような言葉が対比的に用いられている。つまり、ここでマンハイムは、それぞれの一目バラバラに見える事実を、全体的な連関に照らし合わせて位置づけるべきであり、それが社会学のなすべき課題でもあると述べている。

ヒント☛ このように、似たような表現の「連関」をつかんでいこう

そのように考えるならば、さまざまな学問の成立や盛衰を明らかにすることができるのではないかとマンハイムは述べる。学問のなりたちとは何か。それはその学問で使用する概念のセットのようなものである。マンハイムのこのような考え方は、トーマス・クーンの科学論における主要な用語である「パラダイム」を想起させる。³ パラダイムとは、それぞれの学問における、固有な問題設定と個々の問題を連関させる骨格といった意味であるが、これは、マンハイムの「問題連関」に相応する。

さて、ここまでが問題の前段である。これ以降、「政治の科学は存在するか」という本題の部分に入っていくが、ここで覚えておきたいのは、マンハイムが本書で用いている「政治学」という言葉は、一般的な意味と少し異なっているということである。論文を読む際に何か、その論文でのキーワードと思えるようなものが出てきたとき、単純に辞書などでその用語を調べて納得してしまったり、また、一般的に使われている意味で単層的に理解しないことは、重要である。あくまで、その論者は「どのような意味でその言葉を使っているか」を文脈からとらえていくことが、その論者の主張を理解する上で、極めて大切である。というのは、論者は、

通常の単語を用いながらも、どのような意味連関の中にその単語を位置づけるかという点で、独自の意味や主張をする場合が多いからだ。

マンハイムも、この時代にも政治学は存在していたが、マンハイムが考えるような意味での政治学はまだ存在していないと、こう主張しているわけである。

さて、「ほかならぬ政治学がまだ科学になっていないのはなぜか」(201)という表現を用いて、マンハイムが考えるような意味での「科学としての政治学」がいまだに存在しないのはなぜか、という問いが立てられた。これは、われわれの時代が「世界の徹底した合理化の貫徹」(201)を目指していることを考えると一層奇妙だというわけである。

そして、「科学としての政治学」がなぜ存在しないのかということの答えが二通りの推測をもって提示される。1つ目は、この問いがいずれ解ける問題ではあるが、まだその時期には早いからではないか、という考え方である。もう1つは、科学的な政治学という領域は知りうること、つまり知識の限界の外にあるような領域なのではないか、という憶測である。

1つ目の推測について注意したいのは、まず、当時は自然科学が大変発達した時代であった一方で、「社会」という概念がまだ存在しなかった、あるいは少し前に登場したばかりであったという事情である。これは「社会に関する諸科学自体まだやっと緒についたばかりだ、という上述の事実」(201)という表現で語られている。この第1の立場が正しいのであれば、「われわれはただ立ち遅れているというだけで、・・・社会を、自然と同様支配可能なものにするためには、ただ探求の仕事を積み重ねてゆきさえすればいい」(202)のである。ただ、これは、マンハイムの取る立場ではない。

「なぜ政治学が存在しないのか」ということに対する二つ目の答えとして、それが「知識の限界」を超えているということについて、マンハイムは、その推論のもととなるのは「漠然とした感情」(202)であると述べる。つまり、合理的な科学と比べると、政治はあまりに非合理的な領域であるからして合理的な研究になじまないという感情である。

ヒント● ここで、本書における重要なキーワードが登場する。合理的および非合理的である。覚えておこう。

そして、この感情に基づく第2の推論の方向が正しいとするならば、政治を科学的に探求するということの困難さは、「政治という領域固有の性質」(202)に由来するものであると述べている。マンハイムは、ここで、この第2の推論の方をとり、探求を始めるわけであるが、その困難な道を以下のように歩み始める。

さしあたりこの場合、問題を正しく設定することが大きな成果であり、無知の知⁴がある種の満足を意味するのではなかろうか？・・・それでいまや、問題そのものを明確な形で

設定することが第一の課題となる。政治学は科学として可能か、と問われる場合に、何が考えられているのか。(202)

マンハイムはまず、「政治学は科学として可能か、と問われる場合に、何が考えられているのか」(202)という第一の課題を立てることから考察を始める。「何が考えられているのか」ということの意味は、何と何があれば、「科学」といえるのか、何かが科学であるといった場合、その成立条件は何かという意味である。

ヒント☛ マンハイムの探求のやり方を理解しよう。すなわち、未知の問題を解く時に、性急に答えを求めようとするのではなく、まずはわからない点をはっきりさせていこうというアプローチである。一度立てた問題を、より精密に定式化していくことで、問題を解きやすいものにしようとしている。

加えて、マンハイムは以下のように「政治には知識や伝達の不可能なものがありうる」という認識をはっきりさせている。

そうすればすくなくとも、われわれは、なぜ政治という領域には知識や伝達の不可能なものがありうるのか、その理由をはっきり知ることができるように思われるからである。
(202)

ここまでが次のSQ1に至るまでの部分の解説である。ここから「政治という領域」がどのような性格を持つのかという考察が行われる。知識や伝達の可能性という観点を手がかりに、マンハイムは既存の「政治についての科学」と、マンハイムが考える「科学としての政治学」の対比について語り始めるわけである。

SQ1. 既存の「政治についての科学」はどのようなものか？

マンハイムが考える既存の政治学とは、歴史、統計、国家論、社会学、法律、思想史、大衆心理学、大衆支配の技術等(203)である。これらは政治家として行動するための「実際知」(203)であり、政治のうちで、「難なく認識したり教えたりできる領域」(202)であるとしている。⁵ マンハイムにとって、それらは、政治に対する「補助学」としての役割でしかなく、それらを寄せ集めても、科学としても政治学はでてこないという認識を示している。

SQ2. 既存の「政治についての科学」のどのような点にマンハイムは不満を感じているか？

それらの「既存の政治学」は実際知を提供するにすぎず補助学にすぎない。また、知識の寄

せ集めであって中心ができていない、という点にマンハイムの不満がある。このような政治学は、すでに政治家になっている人への実際知を提供しはするが、政治家を育成することはできない。このような場合の政治学は、いろいろある知識の中からどれを使ったらいいのか、というようなことを言っているにすぎない。マンハイムは、政治学は科学として可能なのか、そして、いかにして教えられるのかという疑問を「根源的な問い」(204)であるとして重要視する。それらは既存の政治学のような「実際知の寄せ集めではありえない」(204)として明確に否定されるのである。

ヒント☛ 「では、いったい問題はどこにあるのか」(204)。ここで、話題が切り替えられることに注意しよう。

SQ3. 「政治学は科学として成りたちうるか」という問いに対して、第1ステップとしてマンハイムはどのような定式化を試みているか？

以下の部分が重要な箇所である。

さきにあげた諸科学は、社会なり国家なりを歴史的にできあがった対象として取り扱う点では、共通の構造をもつ。それにたいして政治的行動の狙いは、国家や社会をまだできつつあるものとして把握するところにある。政治的行動は、流動する諸勢力のうちから永続するものを形づくるために、瞬間のうちに創造されるものへ目を向ける。こうして、問いは次のような形をとる。「流動しつつあるもの、生成しつつあるものについての知識、創造的行為についての知識は存在するか」(204)

まず、マンハイムは既存の政治学がなぜ、ここで彼が考えている「科学としての政治学」として不満足なものであるかという点をさらに述べている。つまり、既存の政治学は、政治をできあがったものとして見なしているというところにマンハイムの最大の不満がある。マンハイム自身の考えている政治学はそのようなものではない。つまり、「できあがったもの」に対比して登場するのが「できつつあるもの」への関心である。「政治的行動は、流動する諸勢力のうちから永続するものを形づくるために、瞬間のうちに創造されるものへ目を向ける」という部分で表現されているように、マンハイムがここで問題としているのは、常に変化するものに対する学問の可能性の追求である。ここから、「流動しつつあるもの、生成しつつあるものについての知識、創造的行為についての知識は存在するか」という問いへの定式化がなされる。ここで、流動や生成するものとは、刻一刻と移り変わる社会状況であり、全体性や連関のうちに捉えられるべきものである。

ここで、第1ステップの定式化は、以下のとおりになる。

政治学は科学として可能か→定式化—第1ステップ

「流動しつつあるもの、生成しつつあるものについての知識、創造的行為についての知識は存在するか」

これは、また、以下のようにも言い換えられるであろう。

→変化しているものの法則とは何なのか。準法則的なものは存在するのか？

→または、そういう認識はいかにして可能か？

→流動しつつあるもの、生成しつつあるものについての認識はどのようにして可能なのか？⁶

「政治学は科学として成立するか？」という問いは、漠然としており大きすぎる問いである。かつ答えが事前に見えにくく、どのようにアプローチしてよいか不明確な問題である。ゆえに、マンハイムはこの問題を、「常に変化しているものの知識は存在するか？」と定式化し、先に、「政治学は科学として可能か、と問われる場合に、何が考えられているのか。」(202)と自身に問うたことに答えているのである。

さて、この第1の段階の定式化に続いて、マンハイムはこの意味をさらに以下のような問いをもって、明確化しようとする。

ところで、社会的な領域で、できあがったものと、できつつあるものとを、こういう仕方
で対照させることは、どんな意味をもちうるであろうか。(205)

そして「先行研究」として登場するのが、シュフレ（オーストリアの社会学者・政治学者）の以下のようなダイコトミー⁷である。シュフレは社会—国家生活を次の2つの側面に分解した。一つは、「型にはまったように、繰り返し同じように反復する一連の社会事象」(205)という側面であり、もうひとつは、「まだすっかりできあがっていないために、臨機の決断によって、状況が新しい形につくりかえられる余地が残っている事象」(205)という側面である。最初の方の側面は、「慣例に従う国務」であり、「行政」である。これは、マンハイムの考える政治の領域ではない。マンハイムがこの論文で焦点をあてたい領域は、むしろ後者の側面であり、これをマンハイムは「政治」と呼ぶのである。マンハイムは、このように大きく政治という言葉で表現されるものを「できあがったもの」と「できつつあるもの」とに対照させて、その意味を考えていくことで、「できつつあるもの、できあがっていないもの」に関する科学という難しい問題にせまろうとしているのである。

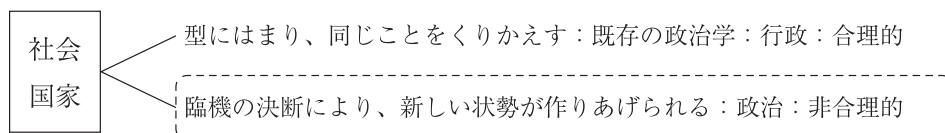
このように、社会生活を「行政」と「政治」という二つの側面に分けた後、さらにそれを異なる2分法に関連づけることで、マンハイムは論をすすめていく。マンハイムが以下のように書いているところが、その始まりである。

ところで、この対照をもっと原理にまでさかのぼって把握しようとする場合、とりあえず次のことを確認することができよう。(206)

ここで彼が持ち出す新たな2分法は、合理—非合理の対比である。

どのような社会過程も、型にはまった部分、つまり「合理的な領域」と、それをとりかこんでいる「非合理的な活動の余地」とに分解することができる。(207)

今までのところをまとめて図式化すると、以下のようになるであろう。



そして、興味深いのは、この二つの側面の間の競合関係に、自分たちが生きている時代の特徴を見いだしている点である。

…そうすると、ここでもう一步進んだ確認事項がおのずから明らかになる。すなわち、われわれの世界の特徴は、できるだけいっさいを合理化して、管理機構のもとに統御可能にするとともに、非合理的な活動の余地をなくしてゆこう、とする傾向をもつところにある。(207)

そしてだからこそ、この非合理の領域の合理化は可能なのか、と問うているのである。つまり、マンハイムの考える政治学が可能かどうかというのは、この非合理の領域の幾分かを政治学として合理化するという事とはどういうことなのか、それは可能なのか、と彼は問うているのである。

近代の特徴は「すべてを合理化する」ところにある。図で考えると、いろいろな定まらない漠然としたものを解明し理論づけて、すべて上の領域へと送ることにある。このような方向性を、ヴェーバーは「脱魔術化」と名づけた。たとえば昔は、雨は魔術や呪術でふらせるものだ

ったが、近代では、古タイヤを燃やすなどといった何らかの意味で科学的な方法が用いられることがある。スキー場での人工雪を考えれば、雪を合理的に知識で降らすことは可能になっている。

マンハイムは、この「脱魔術化」がどこまでどう進むのかという点に時代診断の意味からも深く興味を抱いているように思える。実は、「政治学は可能か」とこの論文で問うときにこの問いが基底にあるのではないかと思えるほどである。というのも、かれは、この数ページ前でも、この政治学の未成立に関する疑問を掲げた後で、同様のことを指摘しているからである。それは、201ページにある。

こういう問題を設定することによって、・・・ほかならぬ政治学がまだ科学になっていないのはなぜか、という問いも解決されうるのではなかろうか。そもそも、われわれの時代の特徴が、世界の徹底した合理化の貫徹をめざしているところにある以上、政治学がまだ存在しないという事実は、それだけいっそう奇妙なことといわざるをえないのである。(201)

ヒント☛ このように異なる表現をとりつつも、繰り返し出てくるテーマに気づくことは、古典を学問的に読む際には、非常に重要である。つまり、その論者がなぜある問題を重要だと思っているのかということの、さらに深い理由が見えてくるからである。

ヒント☛ また、207ページにおいて、「非合理的な活動の余地」という表現が2回出てきていることにも、注意されたい。加えて、ここで言われている合理的／非合理的は、一般的な意味とは少し違うことにも注意したい。一般的な意味である「むだなく能率的」「道理や論理にかなっている」よりもむしろ、注2(211)に書いてあるように、「型にはまっている」かどうか、という点に重きがあることに注意すること。

SQ4. 「行為」とはどのようなものと考えられているか？

さて、行政vs政治、合理vs非合理という上記の対比の移行をさらに詳しく考えるために、マンハイムは2つの概念「**行為**」と「**行動**」を区別する。論の切り替えの部分は、以下の部分である。

こういうふうには合理化された機構と、非合理的な活動の余地とを対照させて把握することによって、いまや行動という概念をもう少しはっきりと規定する道が開けてくる。(207)

マンハイムが行動という概念の方に重点を置いていることは明らかであるが、まずは、それを浮き立たせる意味もこめて、「行為」ということの意味合いを確認しておこう。

「行為」とは、「合理化された機構の内部で個人の決断抜きで、規定どおりに行われる」(208) ことである。具体的には、「官僚が与えられたさまざまな規定に従って書類の束を処理する場合」(207) や、「裁判官が、ある事件をある判例に当てはめて裁決する場合」(207) や、「工場労働者がねじを規格どおりの手順でつくりだす場合」(207)、「技術者が、自然の経過を支配しているある一般法則をなんらかの目的と結びあわせるような場合」(207) も、すべて、「行為」である。

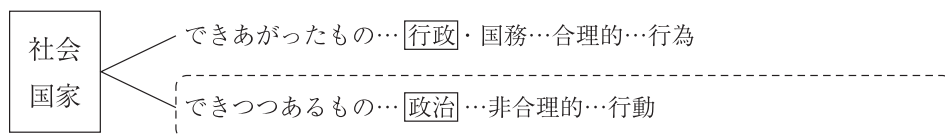
ヒント▶ ここで述べる「行為」も、一般的な意味ではなく、マンハイムがそれにどのような意味を持たせているかに注意してみよう。たとえば「再生産的行為」(208) もマルクスの意味ではなく、型どおりに繰り返す、くらの意味である。

SQ5. 「行動」とはどのようなものと考えられているか？

「行為」に対して「行動」は、個人の決断を強いるところでなされるものであり、実践や全体などにかかわる概念である。

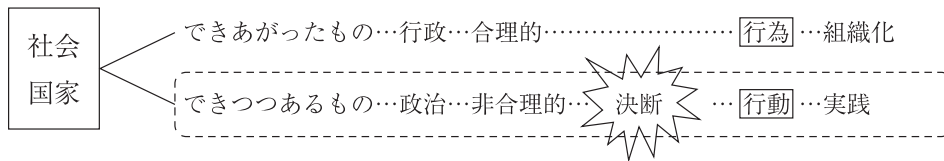
行動は、まだ合理化されていない非合理的な余地が姿を現わすところで、統御されていない状況が決断を強いるところで、はじめて始まる。(208)

ここでの大きなキーワードは決断である。そしてこの決断という言葉は、3 ページ前で「政治」と関連づけて使われていたことに気づいてほしい。シェフレが社会—国家生活を2つの側面に分けたときに、「まだすっかりできあがっていないために、臨機の決断によって、状況が新しい形につくりかえられる余地が残っている事象の側面」(205)として、政治と関連づけられていた。



SQ6. 「行為」と「行動」の違いは？

「行為」と「行動」を分けるのは、重要なキーワード「決断」である。決断があるかないかによって、行為と行動が分けられる、といえよう。図式化すると下記のようなになる。



さて、「行動」というものを定義したその直後に、マンハイムは、「理論と実践との関係」という副題にもなっている問題を持ち出す。後でさらに検討することを予告しつつ、いくつかのことをこの点について指摘していくことになるが、行動と行為の区別が、理論と実践との関係の問題と密に関連していると認識しているマンハイムの言葉をもう一度みてみよう。

行動は、まだ合理化されていない非合理的な余地が姿を現わすところで、統御されていない状況が決断を強いるところで、はじめて始まる。ところでこの点に、理論と実践との関係という問題が成り立つ。(208)

「はじめて始まる」という述語の注意してほしい。行動が始まるところで、理論と実践の問題がはじめて浮上してくるとマンハイムは述べている。そして、上の論述の展開は、それが彼の中心的な問題関心と、密接に関連しているのものであるということが読み取れる部分である。一見、唐突にもみえるこの「理論と実践の関係」問題の提示は、しかし、次のように、ここまで何重にもわたって構築してきたダイコトミーと関連づけられて、意味をもつようになる。マンハイムは以下のように続ける。

社会生活のうちで、何もかも、生そのものさえ合理化され、組織化されているような部分については、もちろん知識が存在する。そこでは、理論と実践の緊張という問題は全然成立しない。なぜなら、一般法則に従って、分類することは、たんなる処理作業であって、まだ実践という名で呼ぶことはできないからである。(208)

ここで、合理化、組織化、知識、理論が一方に、そして実践が他方に分けられ、実践の意味合い（これもマンハイムがもたせている意味合い）が、注意深く、輪郭づけられる。つまり、「一般法則に従って分類することは、たんなる処理作業」であり、前出の対比で言えば「行為」である。そして、それは、「実践」というもののなかには入らないと規定しているのである。

マンハイムはさらに続けて、合理／非合理の対比も導入して、彼の問題意識を描きだすことを続けている。

ヒント■ このように、自分の問題意識を、いろいろな側面からさまざまな表現を用いて描き出すということは、社会科学や思想の領域での論述において、よくなされることである。というのは、この領域においては、問題意識そのものの新規さが、その著作の重要度を決定し、その著作が「古典」となるかどうかを決めるといった側面があるからだ。

だが、われわれの生活がどれほど広く合理化されているにせよ、それでもこの合理化は、すべて部分についてだけの合理化にすぎない。今日の段階でもわれわれの社会のもっとも重要な領域は、やはり非合理的な基礎の上に置かれているからである。(208)

「われわれの生活がどれほど広く合理化されているにせよ」の部分は、先にてできた私たちの時代が「世界の徹底した合理化の貫徹」を目指しているという小主題と関連づけて考えるべきであるが、このように合理化が進行しているにしても、しかし、それは、部分部分の合理化にすぎない。つまり、ある一つの合理がすべての社会領域を覆うのではなく、それぞれ微妙にことなつた合理化が、それぞれある一定部分の社会領域をカバーしているにすぎないということが述べられている。例として、マンハイムは、以下のような事柄を指摘している。

- ① われわれの経済は、たとえ技術的には徹底してあまねく合理化され、部分的には精密に計算できるようになっているにしても、まだまだ計画経済と結びついてはいないし、トラスト化と組織化へのあらゆる傾向にもかかわらず、決定的な点では依然として自由競争に基づいている。
- ② われわれの社会の仕組みは階級関係に基づいて構成されている。
- ③ 内政や国際関係における権限は、非合理的な闘争のうちで獲得されるし、したがってそこでは運命の決定がキャスティング・ボードを握っている。(208-9)

そして、そればかりか、最も重要な領域は、実は今でも合理化されていないのだということを述べている。

それでは、「われわれの社会のもっとも重要な領域」ということで、マンハイムはどういったことを考えているのであろうか？

ところで、組織化もされないし、合理化もされないような生が出現し、行動や政治が必要となる、あの非合理的な活動の余地は、こういう経済競争と権力闘争という社会構造の二つの非合理的な中心から形づくられる。(209)

「経済競争」と「権力闘争」、つまり、市場と政治である。そしてこれらの2つの領域は、「非合理主義の抑圧と歪曲とが集中した形で始まる場所」であり、また、それゆえに、社会学によって、そのありさまを「構造的に把握」するのに適した場所でもあるのだとマンハイムは主張している。

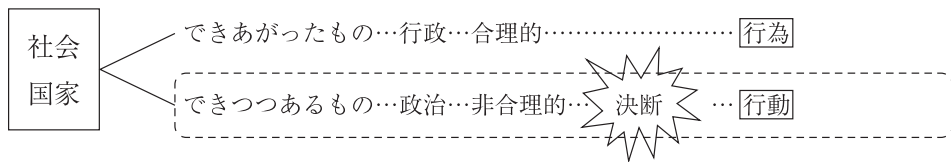
ここで、「理論と実践の関係」に立ち戻ると、マンハイムは、実践が要求される非合理的な領域で、なお、そこで役にたつような理論は、可能なのか、ということを追っていたのである。

SQ7. 「政治学は科学として成りたちうるか」という問いに対して、第2ステップとしてマンハイムはどのような定式化を試みているか？

政治学は科学として可能か→定式化—第2ステップ

この非合理的な活動の余地についての知識、またそこで可能な行動についての知識は存在するか。いまや問いは、こう立てられなくてはならない。(209)

図式化したもので考えると、「下記の点線で覆われた部分の知識は存在するのか？」というのが上記の問いの意味するところである。



SQ8. 「科学としての政治学」における困難とはどのようなものか？

上記のような形に、「政治学は科学として成りたちうるか」という問いが定式化されたとしても、まだ困難がある。マンハイムの記述にならって列挙しよう。非合理的な活動は、

1. 動態であること：対象がどんどん形をかえてしまう…**傾向**しかつかめない

「固定した対象のもつ**性格**ではなく、**傾向**であり、生成のうちで把握され、たえず形を変える、流動的な**動態**であり、**生命力**である」(210)

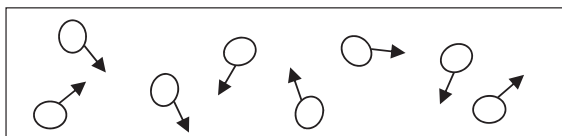
ここで、「生命力」という言葉が入っていることに注目されたい。実際、マンハイムは、これに関連する言葉を他の箇所においても用いている。例えば、「全体的な生の連関」(200)、「合理化もされないような生」(209)といった表現である。

2. 変化すること：力の状況、配置がかわってしまう…型や法則を引き出せない

3. 自身も拘束される:理論家が外から状況を見るのではなく、理論家もうごめく中にいる。
つまり、理論家の立ち位置によって見え方がかわってしまう。
4. 思考も拘束される:考え方の形式も、実は自分がどこに立っているかで異なる。

イメージ図

※位置や方向によって
見え方が異なる



※権力、行為などの概念も、同じ言葉を使っている内容が変化している。

例えば、物理学においても、どのパラダイムによるかによって、「力 (F)」は、下記のように異なっている。

<p>アリストテレス力学</p> <p>力 = 意志</p>	<p>ニュートン力学</p> <p>$F = ma$</p>	<p>量子力学</p> <p>$F = \frac{\text{数式}}{\text{数式}}$</p>
--------------------------------	---	---

つまり、パラダイムが異なると認識の構造が異なってくる。トーマス・クーンは、自然科学の分野において、このことを主張したが、それよりかなり早い時代において、マンハイムは社会科学の分野において、このようなことを指摘したのである。

さて、上記困難の3番目と4番目は、さらなる説明が必要であろう。3番目の点について、マンハイムはこう書いている。

第三に、考える主体である理論家自身、この非合理的な活動の余地の外にいたのではなく、闘争しあうさまざまな力にかかわっている、というところに困難がある。このかわりあいによって、彼の価値評価や意欲は一面的に制約されざるをえないからである。(210)

そして、4番目は最も重要な点である。制約されているのは、「価値評価や意欲」だけではないとして、さらに以下のように説明を続けている。

問題を設定する独自の仕方も、カテゴリーの道具立てさえ含めた思考法のもっとも普遍的な形式も、じつは、理論以前の政治的な基盤によって拘束されていることがわかってくる。(210)

これは、何かを考えたり評価したりする場合にも、そもそもそれをするためには、主に概念を中心とした道具箱が必要であるということである。そして、道具箱がちがうと、作品として出来上がってくる問題設定も、異なってくるのである。というのは、概念というカラフルなビーズも、どのようなものが入っているかは、道具箱によって異なるであろうし、それらをどのように組み合わせるかという点でも、針金で結びつけるのか、それとも粘土に当てはめていくのかと点で、出来上がる作品におのずと違いがでるのである。

マンハイムは、通常の期待からすれば、すもうをするにしても、すもうをする土俵は、共通のものでなければならないということを使って、上のことを説明している。

考える主体が争いに参加するということはあるだろう。しかしその場合にも、それに基づいてものを見、それを規準にして論判に決着をつける思考の基盤そのものは、争いの外に免れていなければならない。(211)

しかし、政治における争いは、同じ思考の基盤に基づくものではないのだ、というのがマンハイムの主張である。政治における対立は、ちがう土俵にたつての争いとなると述べているのである。そして、マンハイムは、まず、この主張、つまり、「政治の領域では問題の設定や思考様式そのものさえ統一をもたない」という主張自体を検証することに取りかかるのである。第2節のタイトルは、したがって、「認識そのものが政治や社会によって拘束されているというテーゼの証明」となる。

SQ 9. 「第1節の表題「なぜこれまで政治についての科学は存在しなかったのか？」に対する答えはどのようなものだと考えられるか？

これは、上で強調したこと、つまり、第4番目の困難について、だれも学問的に明確にしたり、それについての探求を行っていなかったからであるといえよう。つまり、政治的な争いから独立した思考基盤といったものが存在しないということ自体が、しっかりと認識されていなかったからである。

【注】

- 1 この「学問的読み」の試みは、山田吉二郎先生によって、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院ご在職中に熱心に追求されたものである。拙稿のスタディ・クエスチョンを使った方法は、山田吉二郎先生の「抜き書きによる読み」のやり方を実際経験した筆者による若干の工夫である。
- 2 本稿は、2011年になされた大学院講義に基づいている。参加してくれた糸川悦子さん、小塚洋平さんをはじめとした、国際広報メディア・観光学院の院生の皆さんに感謝する。志子田敦子さんは、講義の詳細な記録を作成して下さった。本稿はそのメモをもとに加筆修正したものである。
- 3 トーマス・クーン（中山茂訳）『科学革命の構造』（みすず書房、1971年）
- 4 「無知の知」とは、ここでは、自分自身の無知を認識することが、翻ってほんとうの意味での知恵の始まりになる、というソクラテスの意味で使われている。
- 5 政治家をつくるためのカリキュラムは時代によって変遷している。現代はMBAに見られるように、政治と経済が近いものとなっているように見うけられる。
- 6 たとえば現在の福島原発の状況は、まさしくマンハイムがいうような「生成しつつあるもの」であるといえよう。マンハイムが立てている問いとは、そのような時に役に立つ知識は存在するのだろうか、という問題なのである。講義の年は、2011年であり、「理論と実践」の関係を喚起するため、そしてより身近な問題としてわかりやすくするため、このようなコメントをした。
- 7 マンハイムはこのあと、様々なダイコトミー（二分法）をもちいて、問題意識を描き出しているが、これらの分け方は厳密なものではなく、実際にはそれらの境界は漠然としていると自ら述べていることに注意されたい。理念型を用いた論の進め方である。

《SUMMARY》

Reading Classics through Study Questions

--‘THE PROSPECTS OF SCIENTIFIC POLITICS: The Relationship between Social Theory and Political Practice’ by Karl Mannheim--Part1

Miori NAGASHIMA

This is an attempt to propose and demonstrate a way to teach reading academic masterpieces, which are otherwise difficult for readers to understand. The proposed ‘Study Question Method’ helps students read through and deeply understand the target academic manuscript. By using this method, we expect students to learn how to read so-called classic texts precisely and critically. The sample piece selected here is ‘THE PROSPECTS OF SCIENTIFIC POLITICS: The Relationship between Social Theory and Political Practice’, the second article in “IDEOLOGY and UTOPIA” by Karl Mannheim (1893~1947). Part 1 examines Section 1 of the article, ‘Why is there no science of politics?’, and consists of study questions and corresponding answers and comments to facilitate students’ understandings.